

06-05-27 (村岡)

コアメンバーの意見(村岡)

1. 確認事項

- ・基本高水の定義：計画規模に対応する洪水について総合的な治水対策を決めるための基本となる最大の洪水であり、目標値である。
- ・総合治水の原則(筆者自身の信条):
 - 豊かな自然環境を残す(新規ダムは造らない)
 - 健全な水循環系を形成する

2. 基本高水流量を一本化するための論点は何か

- (1) 16年型修正降雨モデルによる甲武橋ピーク流量4700を基本高水とすることは適切か。
- (2) 平成16年10月23号台風による既往最大の洪水(甲武橋ピーク流量2900)に対して、総合治水を計画する上でどのように対処するか。

3. コアメンバー個人の主張(村岡)

- 1) 既往最大の2900洪水は直近に体験した貴重な記録である。この記録と体験こそ重要視し、流域住民の洪水の恐怖をやわらげ、とりあえず安心してもらえる対策として、河道対策の2800は整備計画として早い段階で先行させるべきである。対応の技術的な問題は大きくない。(もちろん整備計画としての目標値はこれ以上の値となる。)
- 2) 16年型4700は、棄却条件にわずかに外れた一つの観測資料を、棄却条件に入るように降雨パターンを修正して求めた一つの試算値にすぎない。この操作は「直近の体験記録」とは関係ない値である。
- 3) 棄却基準を設定してそれを満足するピーク流量の最大値を基本高水にするという方法は、武庫川現況の水文統計学対応として合意を得た方法なので、その結果求めた37年型4000は基本高水として問題のない値である。16年型未修正降雨パターンに基づくピーク流量が棄却されたということは、一つの統計量が不適合であったという結果に過ぎない。
- 4) 計画規模1/100は長期の計画であり、「基本高水を対策と関連づけて選定しない」ということは、およそ30年後以降にはその時の気候変動の状態、技術や社会情勢の状態を見て対策の具体案を段階的に検討するのだと考える。その時点で、洪水の発生が増加し社会資産の保護も一層増すとみなし、安全度をより高く設定しないといけないと判断されるならば、計画規模を見なおして1/150あるいは1/200に高めるという必要も生じよう。そうなれば平成16年10月洪水も水文統計学の重要な対象になるに違いない。
- 5) 上記3)で基本高水を4000とする提案に関連して、超過確率洪水の生起とその対策については配慮しなければならない。その予想値として4700あるいは5000というレベルのピーク流量を想定することはあり得る。
- 6) 「新規ダムを造らない」という原則は、整備計画のみならず、基本計画の立案においても堅持する原則である。(困難であっても挑戦したい。) そうなると、いくら対策とは関連させないとは言え、新規ダムに代わる対策はあり得るのかという点についてイメージしておく必要がある。筆者の対策イメージは次の3点である。

バイパス地下水路

山中調節池

複数の小規模治水ダム

以上